

Title	内村鑑三の平和思想と朝鮮無教会の動向
Author(s)	金, 文吉
Citation	アジア・キリスト教・多元性 (2004), 2: 125-136
Issue Date	2004-03
URL	http://dx.doi.org/10.14989/57679
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

内村鑑三の平和思想と朝鮮無教会の動向

金 文吉

(一) キリスト教と戦争・平和

キリスト教あるいはキリスト教思想において「戦争」と「平和」の問題がどのように取り扱われているかを見てみよう。

キリスト教思想にとって、戦争の問題は、単純な問題でも、すでに「片づいて」しまった問題でもない。戦争は国家や権力との問題と結びつくことによって、キリスト教思想、特にその社会倫理思想に対して困難な問題提起となっている⁽¹⁾。歴史的事実がこの事態を端的に示している。一方において、キリスト教は山上の垂訓などにおけるイエスの言葉に基づいて、兵役拒否の思想を生み出してきた。すなわちコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認以前の古代教会における平和主義、兵役拒否、あるいは再洗礼派、クエーカー派、プレズレン派の宗教改革後に成立したセクトの兵役拒否（16、17世紀）、更にはベトナム戦争を拒否する人々に対するアメリカの諸教会の支持などである⁽²⁾。彼らは、「あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな、剣で滅びる」（マタイ 26:52）、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」（マタイ 5:44）、「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」（マタイ 5:9）などの福音書のイエスの言葉に従って、重武装によって守られた《ローマの平和》＝軍備と戦争による国家の平和に対して、《神の平和》＝愛敵と暴力拒否を対峙させた。しかし、これはキリスト教史の示す現実の一面にすぎない。キリスト教会の戦争と兵役に対する態度は、コンスタンティヌス帝による公認によってラディカルな転換を示す。コンスタンティヌス帝の与える保護と特権に対する感謝から、教会は兵役につくキリスト者が軍隊に留まるように勤め、それ以前の教会の兵役拒否の態度を非難するまでにいたった。こうして、「正戦」の思想（四世紀のアンプロシウス）が現れるようになり、中世における異教徒に対する「聖戦」（十字軍）を肯定し推進する道が開かれた。ローマ・カトリックに対する宗教改革によって成立したルター派やカルヴィン派の大教会でも、ローマ・カトリックと同様に、基本的には戦争は肯定された（ローマ・カトリック教会が「聖戦」についての考えを修正したのは、1960年代の第二バチカン公会議以降のことである）。以上のように、キリスト教は一方では、平和主義、兵役拒否を主張し、他方では戦争を肯定し、場合によって積極的に推進するといった、二面性

を持っている。従って、キリスト教思想には、絶対的平和主義（無条件で絶対的な戦争の拒否）から正戦、聖戦の積極的肯定論にいたる多様な立場が存在することになる。もちろん、キリスト教思想史の多様な立場から、非戦論と戦争肯定論の二類型を取り出し、この二類型の緊張関係においてキリスト教と戦争の関係を論じること、あるいはキリスト教思想史を解釈することは可能であろうか、キリスト教思想の戦争論を一方の類型にのみ還元することは可能であろうか。今回私が発表したいところは明治におけるキリスト教指導者内村鑑三の「平和」思想を論じ日帝統治下にあった朝鮮無教会の組織と活動である。

（二）明治のキリスト教会の状況

明治のキリスト教会が置かれた特殊な歴史状況が考慮されねばならない。明治維新以来、政府は皇室神道を中心に天皇を神格化し、天皇に対する忠君愛国の精神を国民に植えつけるために、伝統的思想や宗教をイデオロギー的に動員してきた。こうして天皇制国家が確立する中で、キリスト教会は日本の伝統や忠君愛国の道徳に反するといった非難や攻撃に対して、そうではないという自己弁護をすることを余儀なくされた。キリスト教の大半の指導者たちはキリスト教が天皇制国体に忠実な宗教であることを具体的に示す言動を行い、天皇制確立期におけるキリスト教の自己規制の役割を果たした。これは、キリスト教会の日清戦争への協力の中に端的に示されている。朝鮮の支配をめぐる、清との間に引き起こされた日清戦争（1894年8月～95年3月）に対して、キリスト教会は、東京、大阪、広島、群馬、神戸、京都、名古屋などの各地に戦時協力のための組織を結成し、演説会やパンフレットによる民意の昂揚、戦場の軍隊慰問、軍人遺族の慰安などを行なった。以下、当時のキリスト教会の代表的指導者の日清戦争との対応を簡単に見ておきたい。

内村⁽³⁾は日清戦争が起って間なく、『国民之友』に“Justification of the Korean War”を英文で発表し（この論文は「日清戦争の義」という題で邦訳され同誌に掲載された）日清戦争における日本の正当性をキリスト教の立場より海外に訴えた。またこれに続いて「世界歴史に徴して日支の関係を論ず」、「日清戦争の目的如何」を発表した。これらによると、日清戦争は日本が正義のために戦う義戦である。もちろん内村は元来軍国主義的ではなかったが、義のための戦争が存在することを承認していた。すなわち、彼は「孔子を世界に供せし支那は、今や聖人の道を知らず。文明国が此不実不信の国民に対する道は、唯一あるのみ。鉄血の道なり、鉄血を以て正義を求むるの途なり」（「日清戦争の義」）と言い、「吾人の目的は支那を警醒するに在り、其天戦を知らしむるにあり、彼をして吾人と協力して東洋の改革に従事せしめるにあり、吾人は永久の平和を目的として戦ふものなり」と、きわめて主戦的である。このような日清戦争における日本の正義性の主張は、内村の歴史観にもとづいている。すなわち「新文明を

代表する小国が旧文明を代表する大国⁽⁴⁾」と隣接しているとき、両者の間に衝突がおこり、新しい文明を代表する小国が勝利するのは歴史の示すところであり、これは文明の進歩という世界史的事実を示すものであると、考えた。このように内村は、人類の文明の歴史的進歩という点から東洋における文明進歩の戦士＝アジアの教主たる日本による清征伐として、日清戦争を肯定した。

このような日清戦争における主戦論は、内村だけでなくほとんどのキリスト教会指導者の立場であったのであり、後の日露戦争においても基本的には変化がない。この点について、本多庸一を見ておきたい。東北地方における自由民権論者であり、メンヂスト教会の指導者であった本多庸一は、日清戦争に際して日本基督教同志会の決議の起草者として積極的に戦争に協力した。彼は「日清韓事件は関係ある国家各自の利害栄辱に関するのみならず、実に東洋文明の進退幸福の安危を決するものなり⁽⁵⁾」との判断に立って、大本営の承認を得て、宮川経輝（1857-1936）らと共に戦地の軍隊慰問を行った。先に指摘したように内村は始めから非戦論者であったわけではなくむしろ彼は日清戦争肯定論者として出発した。しかし、彼は日清戦争の現実直面する中で、非戦論者として飛躍することになった。この立場の転換をどのように理由づけ、評価するかは内村鑑三研究の主要な問題点の一つであるが、これまでの諸研究をまとめるならば次のようになるであろう⁽⁶⁾。内村が日清戦争を弁護したのは、正義性（アジアの教主としての日本）のためであったが、彼が非戦論者に転換したのも、この正義性に関してであった。すなわら、内村は明治28（1895）年5月22日のベルアートの手紙の中で、

「支那との紛争は終り候、或は寧ろ終りたるものと謂はれ候、…『義戦』は変じて幾分海賊的の戦争となり其『正義』を書きし預言者は今は恥辱の中に之有候⁽⁷⁾」

と述べている。「義戦」は海賊的な掠奪戦に化し、内村は日本の正当性を弁護したことの誤ちを告白しなければならなかった。戦勝国日本の現実を内村は次のように述べている。

「故戦勝て支那に屈辱を加ふるや、東洋の危殆如程にまで迫れるやを省みる事なく、全国民挙て戦争会に忙しく…而して戦局を結んで戦捷国の位置に立つや、其主眼とせし隣邦の特立は措て問はざるか如く、新領土の開墾、新市場の拡張は全国民の注意を奪ひ、偏に戦捷の利益を十二分に収めんとして汲々たり、義戦若し誠に義戦たらば何故に国家の存在を犠牲に供しても戦はざる、日本国民若しに義の民たらば何故同胞支那人の名誉を重んぜざる、何故に隣邦朝鮮国の誘導に勉めざる、余輩の愁嘆は我が国民の真面目ならざるにあり、彼等が義を信ぜずして義を唱ふるにあり、彼等の隣邦に対する親切は口の先に止りて心よりせざるにあり…⁽⁸⁾」

確かに内村は日清戦争後直ちに非軍備論者になったわけではないが、彼の非戦主義は日露戦争が急迫する頃から顕著になっていく⁽⁹⁾。内村は「余が非戦論者となりし由来」(明治 37 年)において、非戦論者になった理由として次の四つを挙げている。

- 一、聖書である。彼は「十字架の福音が或る場合に於ては戦争をよしとするとは、私にはどうしても思われなくなりました」と述べている。
- 二、無抵抗主義の経験によって、それによって勝利できることを知ったため。
- 三、日清戦争の結果が、戦争の有害無益なことを教えてくれた。
- 四、「The Springfield Republican」という米国新聞の平和主義的主張と 平和主義者の論説の感化。

これらの理由から内村は「余は日露非開戦論者であるばかりでなく、戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。さうして人を殺すことは大罪悪である。さうして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない」と結論するに至った。朝鮮に内村鑑三の無教会信仰が入ったのは内村の非戦論がよく知られ有名になってからである。

(三) 日帝統治期の朝鮮無教会

朝鮮に無教会が入ったのは金貞植によってであった。金は 1862 年 8 月 6 日黄海道海州で生まれた。金は 1902 年独立協会が行なう改革党に加担した理由で日本警察に連行され、獄中生活を送った。獄中生活中宣教師によってキリスト教の福音を聞いて信者になった。出獄後ゲイル(J. S. Gale)宣教師に洗礼を受け、初代朝鮮 YMCA 幹事を務めながら教会の活動をした。1906 年、金は YMCA の仕事で東京に行った。その時、非戦論者で知られている内村鑑三に出会い無教会信者として活躍した。その当時、金の周囲は朝鮮人留学生も多くいた。代表的な名前は柳永模、金教臣、咸錫憲、宋斗用の諸氏がいた。(金沢晃「韓国無教会主義の信仰の昨日と今日」第 92 回無教会研究会、2003 年)

朝鮮無教会の信仰を初めに伝えたのは金貞植であったが、朝鮮無教会キリスト教を復興させたのは金教臣である。金は 1901 年 4 月 18 日咸京南道咸興で出生、キリスト教信者になったのは 1920 年の日本留学をしている時からであった。入国した年の 10 月に内村鑑三の『求安録』を読み、大きな感動を受け 1921 年 1 月内村の聖書研究会に参加、無教会信者になった。7 年間の日本留学生生活を終え、1927 年に東京師範学校を卒業した。7 年ぶりに帰国、咸興永生女子高等学校地理教師として勤務した。教師生活をしながら 1927 年 7 月に『聖書朝鮮』を創刊した。創刊号 8 年後に「朝鮮にキリスト教が伝来してから約半世紀に至っているが、いまだに先進欧米宣教師などの遺風を模倣する状態を脱しえぬことを残念に思い純粋なる朝鮮産キリスト教を

解説しようとして、『聖書朝鮮』を発刊したのである。願わくは朝鮮にキリスト教の力ある教訓を伝達し、聖書的な真理の基盤の上に永久不滅なる朝鮮を建立しようとする願い。⁽¹⁰⁾」と告白した。すなわち彼が『聖書朝鮮』を発刊した目的は西欧キリスト教の思想を脱皮して朝鮮風土に合うキリスト教を伝播するためであった。

それは「私の無教会主義とはきわめて広義にまた精神的に解する。旧新約聖書を貫通する精神、キリスト、パウロ、ルターの精神、キリスト教の精神、または宇宙にいっぱい満ちている正気と解する。私には無教会主義とは真正のキリスト教を意味するのであり、無教会主義とは真正のクリスチャンを意味するものである。教会の有無、洗礼の有無、そのようなものは何等関係がない。無教会主義、すなわち福音、無教会主義者すなわち信者である。私の無教会主義とはこのようなものであり、この無教会こそ私が内村先生から学んだところの最善、最美、最高のものであり、これこそはキリスト自身の精神であると確信する。…救いはキリストにあることを明白にすることが無教会主義の使命である。⁽¹¹⁾」

1885 年に、内村は新島襄宛の手紙において、「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です」と述べている。“I for Japan, Japan for the world, The world for Christ and all for the God”という、内村の有名な言葉を、民族主義の思想として朝鮮人金教臣も受け入れ“Bible and Korea, Bible to Korea, Korea on Bible”すなわち「聖書と朝鮮、聖書を朝鮮に、聖書を朝鮮のため」と呼び、民族主義者として活動した。

彼の民族と教会は当時日帝統治下に朝鮮総督府と激しい戦いを展開した。彼は総督府が実施する「皇民化」運動の一環であった創氏改名を反対し、また神社参拝拒否運動を行い労働者強制連行などで苦しむ朝鮮民族のため働く人であった⁽¹²⁾。

すなわち金教臣の考えは信仰の根本である聖書をまちがいに正読し、朝鮮民族を愛し、美しい国土を造る使命感を持って日本に学んだことである。彼の平和は、まず非暴力民族主義者として『聖書朝鮮』を発刊し、朝鮮民族に自由と平和を教えた。3・1運動以降日帝統治下の抵抗する朝鮮民族が大勢であったが金教臣は『聖書朝鮮』を執筆しながら抵抗したことである。結局『聖書朝鮮』は1942年3月158号を持って廃刊したが、その理由は「復活の春」「弔蛙」という文章の内容の問題で総督府の廃刊命令があった⁽¹³⁾。「復活の春」と「弔蛙」は当時日本天皇制国家が滅亡するという内容であった。

また、今日金教臣はハンセン病の父と呼ばれている。彼は『聖書朝鮮』においてハンセン病患者から相談を受けたこともしばしばあり、158号までで、155件を数えることができる⁽¹⁴⁾。

咸錫憲は西欧的な教育を受けたけれども、東洋的な思想を受け継いだ。例えば、老子の平和と荘子の平和思想を持って働いた。咸錫憲の儒教思想については韓神大学の安秉茂氏が「咸錫

憲の平和思想」(『咸錫憲伝集』20巻、ハングル社、365頁)で論じている。咸は日帝統治下において日本無教会指導者内村鑑三の平和思想を受け、キリスト教信者になりキリスト教平和思想を展開した。彼は特に旧約聖書イザヤ書をよく読んで韓国の平和運動を考えたと告白した。また平素尊敬する人物はインドの平和思想家ガンディーであると考えた。内村は『聖書之研究』を、金教臣は『聖書朝鮮』を執筆しながら平和運動を展開したが、それに対して、咸錫憲は『

(シアルの声)』を持って平和運動をしたことになる。『(シアルの声)』は(シアル=種)というのは「民」と「国家」の関係を表している。「地」(種の蒔かれる土地)である国家は「民」(地に蒔かれる「種」)を保護する義務があり、「民」はよく育ってよい実を实らせる義務がある。それにもかかわらず「地」が「民」を保護せざる時にあって、咸は「民」を保護するために直接平和運動のため反政府運動を起こし、1965年朴正熙軍政の時、獄中生活をしたこともある。獄中生活で考えたのは無教会から離れクエーカー派に移ることであり、将来韓国の平和運動に献身する計画をした。出獄後ベトナム戦争反対とあらゆる平和運動をはげしく展開した人物である。咸は1990年代にこの世を去るまで40余年間平和運動家として有名であった。

咸錫憲の理想を今日まで研究している人は安秉戊である。彼の詩文「咸錫憲の平和思想」(『現代平和思想の理解』高麗大学校 平和研究所 1992)を見ると、咸錫憲は、西欧化した教育制度下で教育を受けたが、最後まで東洋人として留まった。彼は大学に行って西欧の学問を学ぶ機会がなかったためであるかもしれないが、いつも彼の主張や敘述方法は東洋的であった。それでいつも平和について話すが、西洋的な平和論を展開した事があまりない。彼は最初からアカデミズムには興味がなかった。

彼の平和に関する書籍を見れば、みな彼の確信の宣言であり、論証的ではなかった。彼の思考を探究するためには彼の平和論の背景になった思想を検討する必要がある。咸錫憲に影響を与えた古典的なものは次のようだ。これは彼の平和思想にも相当含まれている。

第1は東洋の老荘学派が挙げられる。彼は老子を平和主義者の第一だと断言した。同時に彼は「平和運動を起こせ」で平和運動に必要な条件を書き、荘子の主張を参考にする。この二人の影響はこれからも具体的に反映するであろう。

第2はキリスト教が戦争に対し、何の態度がない事を批判している。しかし、彼はイエスから平和主義的影響を受けたのは勿論、それ以前に旧約の「イザヤ書」に決定的影響を受けた。

第3はヒンドゥー教を挙げられるが、彼は長い間ヒンドゥー教の古典である「バガヴァッド・ギーター(ヒンドゥー教理)」を教え、これを翻訳した。しかし、彼はヒンドゥー教自体よりヒンドゥー教を生活から体験したガンディーを通して、ヒンドゥー教の根本精神を吸収した。

第4は、クエーカー派を挙げられる。彼は伝統的キリスト教から離れ、日本からきた無教会主義に加担をした。しかし、「歴史はまた一歩進んだ。」との宣言と共に無教会を脱会し、す

ぐクエーカー派に加入した。クエーカー派はガンディー自身も高く評価し、無教会主義の創始者である内村鑑三も高く評価した。咸錫憲はこの宗派に加入した理由は彼らの平和運動に加担するためだという。

最後に、彼は韓国歴史事態を平和主義的モデルと見ている。この思考は彼の根底にあり、彼が三〇代に書いた韓国歴史書の処々に見える。以上が彼の平和思想に影響を与え、また生涯を反平和的現実には挑戦しながら得た、平和思想の人脈である。

次は最近、亡くなられた韓国の無教会主義者盧平久を紹介したい。盧平久は昨年（2003年）9月8日、ソウルの自宅で死亡した。葬地は韓国国立墓地に埋葬した。彼の死去について、無教会の信者であり無教会について研究をしている洪ジョンボ（ ）は「盧平久先生と私」という死者について次の通り紹介している。

盧平久先生は金教臣先生の後を継いで、韓国無教会の基礎をつくった方である。彼は1912年咸鏡北道鐘城漁郎で生れ、1929年培栽中学校3年の時、光州学生運動に関わり1年間投獄された。出獄後、学業の道を歩まず、ソウル麻布トワ洞土幕貧民村で無産児童教育に数年間従事した。1936年、自らの人生問題に振り向き、金教臣先生の紹介で日本に渡った。東京で内村鑑三の高弟である、塚本虎二先生の主日聖書研究会で10年間聖書を学んだ。1945年に帰国し、翌年から信仰雑誌『聖書研究』（月刊）を発刊した。以後、1999年12月500号の終刊まで、一生を信仰及び聖書研究誌発刊に全力を尽くした。

生涯一度もお金を貸す事がなく、師である金教臣のように雅号（雅号は儒教思想で学者につけられた別名）も持つことなく2003年9月8日に先生は他界された。国立墓地がある、大田の国家有功者墓地に埋葬された（享年91歳）。生前に、国家有功者待遇を拒み、ご子息の有功者の申請を反対された。先生は1946年から発刊した『聖書研究』誌は我国で発刊された聖書雑誌の中で一番ページ数が薄く（普通24-30頁内外）で、一番少ない読者数（普通300余名）、一番高い本、一番長い間発刊した雑誌だと思う⁽¹⁵⁾。

また、内村の無教会の影響は他の教派、崔泰瑢、李竜道の神秘主義キリスト教にも及んでいる。崔は1924年9月から朝鮮キリスト教界の雑誌『新生命』に18回論説を執筆しながら無教会の紹介と朝鮮キリスト教の改革を叫んだことがある。彼は朝鮮無教会宣教を伝えながらキリスト再臨論を主張する神秘主義者として活動した人物である。また李竜道は無教会と交流を持ちながら朝鮮教会の“霊系の父”と名を受け、朝鮮キリスト教界の指導者として広く知られていた。⁽¹⁶⁾

（四）戦後の朝鮮無教会動向

戦後、朝鮮無教会に金教臣の後輩として咸錫憲という人がいる。彼は1901年に咸京道で生まれ、1989年死亡した。彼は生涯に『(シアルの声)』という雑誌を発刊し、平和思想を伝播した。『(シアルの声)』というのは新約聖書にある“ロゴス”のことでもあり「民」の声であると彼が言った。ロゴスは神の言葉であり、万物を造る神であると信じ朝鮮人によく読むように進めた。

前述したように内村鑑三の門下生は殆ど死亡した。金教臣の門下生と咸錫憲・宋斗用・盧平久の門下生は全国で活動している。各所の無教会指導者と集会は次の通りである。

ソウル	ソウル特別市鐘路2街YMCAの7階で、韓方徳氏を中心として 毎週日曜日午後2時聖書集会。 高麗大学校数学科柳希済教授の自宅に集会所がある。ソウルオルユ洞李鎮九先生の自宅に集会所
京畿道	京畿道光明市裴明洙先生自宅に集会所
大邱	慶北大学校微生物学科朴浣教授研究室集会所
釜山	釜山大学校心理学科教授自宅集会所
光州	光州市東区東明洞226-6全準徳自宅集会所

(五) 結論

日帝統治下の朝鮮民族平和運動には次の4つの立場が存在していたと考えることができる。

まず第一は暴力的抵抗運動、第二は非暴力的抵抗運動、第三は道徳的抵抗運動、第四は穏健な立場(潜在的抵抗)である。例えば、暴力的抵抗者は金德基教師である。金德基は上洞協会で教会青年達を集めて軍事組織をつくり、日帝に抵抗したことがある。また、張仁煥教師は日帝問官米人スチープンを米国で殺した。李在命教師は売国した李完用を暗殺しようとした。金教臣の場合は『聖書朝鮮』を通して、「創氏改名」「神社参拝」「ハングル使用」などをめぐり非暴力的な平和運動を展開した。日帝警官の話によれば「金教臣のような非暴力的独立運動家は今まで逮捕された朝鮮人の中で一番悪質な人間であり、宗教のイメージを持って朝鮮民族の精神をより深く植えつけた人である。また朝鮮独立運動は百年、五百年をかけても必ず実行した

人物であった」といった⁽¹⁷⁾。

今日の韓国無教会信者は正確には不明であるが指導者は約 300 余名、信者は 5000 余名であると推測するが、活動は既存教会（他のプロテスタント）より社会活動が多い。例によれば民主化運動、民権運動（特に相談所設置）、戦争不参加平和運動、ハンセン病者ボランティア活動など様々である。もちろん知識を追求する聖書研究も行い、毎月雑誌発刊、文化活動も多く行なっている。

< 文献 >

1. 内村鑑三 「日清戦争の義」「時勢の観察」(『内村鑑三全集』第三巻、岩波書店)
2. 本多庸一「日清戦争に関し我徒の運動」(『福音新報』、第 178 号、明治 27 年 8 月)
3. 関庚培「金教臣の無教会主義と“朝鮮的”キリスト教」
『韓』8 巻 2 号 韓国研究院 1970 年
4. 「金教臣の基督教的民族主義考察」(監理教神学大学碩士論文) 1995 年
5. <http://www.nonchurch.net>
6. 金沢晃「韓国無教会主義の信仰の昨日と今日」第 92 回無教会研究会 2003 年
7. 金文吉『近代日本キリスト教と朝鮮 - 海老名思想と行動 - 』明石出版 1998 年
8. 金教臣『聖書朝鮮』(全巻) 1972 年
9. 朝鮮無教会刊『聖書信愛』1 巻 - 20 巻、聖書信愛刊
10. 咸錫憲著『シアル』(全巻) 1965 年
11. 金丁煥「金教臣の民族精神史的遺産 - 聖書朝鮮の日記を中心として - 」
『韓』8 巻 1979 年
12. 『 』 , , 1994
13. 『 』 , , 1994
14. 『 』 , , 1990
15. 『 』 , , 1993
16. 『 』 1,2 』 , , 1986
17. 『 』 , , 17
18. 『 』 , , 1991
19. 『 』 , , 1994
20. 『 』 , , 17
21. 『 』 1
22. 『 』 1994

23. 「 」 1985
24. 「 」 1983
25. 「 」

注

- (1) 宮田光雄『平和の思想史的研究』（創文社、1978年）の章「神の平和と地の平和」、章「兵役拒否のキリスト教精神史」を参照。この他に、関根正雄、松木治三郎、武田清子『戦争と平和について』（新教出版社、1950年）井上良雄「戦争」、『キリスト教倫理辞典』、日本基督教出版局、1967年、249-251頁）カール・バルト、『キリスト教倫理』（新教出版社、1964年。これはバルトの『教会教義学』の第三巻第四分冊の村上伸氏による訳と要約である。特に、第二章の第八節「戦争の問題」）が参照されるべきである。
- (2) 宮田光雄の前掲論文を参照。
- (3) 内村の戦争論については、次の諸論文を参照。
土肥昭夫、『内村鑑三』（「人と思想シリーズ」、日本基督教団出版局、1964年）118-147頁。田畑忍「内村鑑三に於ける平和主義思想の展開」（『思想』第353号、1953年、11月）。宮田光雄「近代日本のキリスト教平和思想—内村鑑三の非戦論」（『平和の思想史的研究』創文社、1978年）75-102頁。
- (4) 『内村鑑三全集』第3巻に所収の「日清戦争の義」、109頁。
- (5) 本多庸一「日清戦争に関し我徒の運動」（『福音新報』、第178号、1894年8月）。
- (6) 註(3)の文献を参照のこと。
- (7) 『内村鑑三全集』第36巻 414頁
- (8) 内村鑑三「時勢の觀察」（第3巻、1896年8月）226-259頁。
- (9) 例えば、明治29（1896）年の『世界の日本』では、軍備に一定の意義を認めている。
すなわち、「世界の日本たるは、大なる事にして、大なる事は、先づ倫理的に思想に大なる事なり、兵を増すは是が、為めならざるべからず、武に誇らんが為に非ずして義を強いんが為めなり、富を増すは是が為めならざるべからず、快樂を増進せんが為に非ずして、真理の発揚を捕はんが為めなり」と。
- (10) 関庚培「金教臣の無教会主義と“朝鮮的”キリスト教」、『韓』8巻2号 韓国研究院 1970年、25頁。
- (11) 同上 26-27頁。
- (12) 同上 41頁。
- (13) 「金教臣の基督教的民族主義考察」（監理教神学大学碩士論文）1995年、42-48頁。
- (14) <http://www.nonchurch.net> N054.
- (15) 李鎮九『聖書信愛』267号 聖書信仰社 2003年11月、24頁。

(16) 文献表の金沢晃論文を参照。

(17) 盧致準『日帝下韓國基督教民族運動研究』韓國基督教歴史研究 1993 年、57 頁。

[付記] 本稿は平成 13、14 年度の 21 世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」(「多元的世界における寛容性の研究」研究班) による研究成果の一部である。

(きむ・むんぎる 釜山外国語大学校大学院日語日文学科教授 釜山外国語大学校東洋語大学長)

